

敗戦直後、廢墟から誕生した 文芸雑誌群を復刻!

焦土では無数の種が芽生えを待っていた。

戦火が「いのち」を焼き尽くすことはない。

敗戦直後、全国各地で創刊された多数の文芸雑誌が、
そのことを今に伝えてくれる。

次の時代への中継者として、

福岡県発信の、

文芸雑誌『午前』

総合文化雑誌『文化展望』

詩誌『鵬』『ピオネ』

『藝術前衛』の

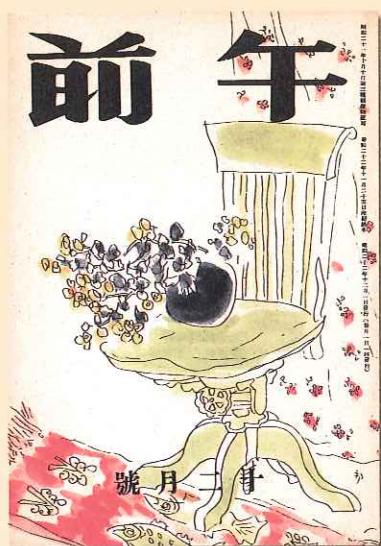
五誌を同時復刻!

福岡発

全国へ



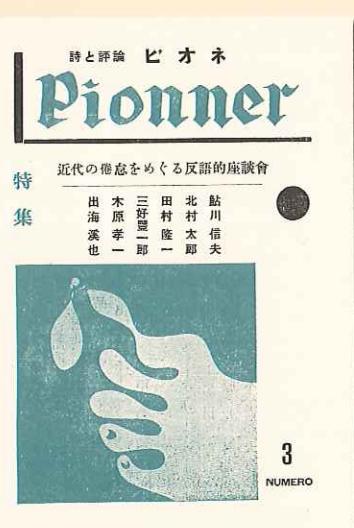
●第1巻第3号 昭和21年6・7月合併号
発行地▶福岡



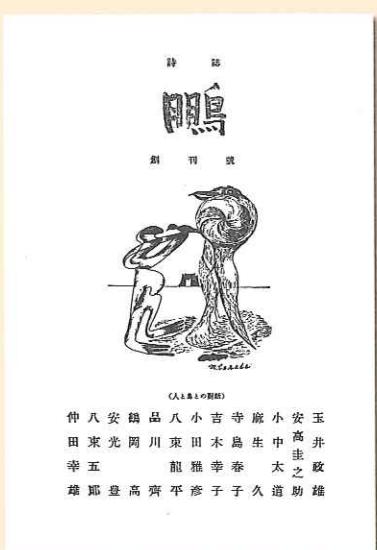
●2巻8号 昭和22年12月号 発行地▶福岡



●第3号 昭和24年12月 発行地▶東京
『鵬』『ピオネ』の合併改題誌



●第3集 昭和23年6月 発行地▶三池



●創刊号 昭和20年11月 発行地▶八幡

6月刊行
2004年

不一出版

第二次世界大戦が終結した直後の文壇の活動状況について埴谷雄高は次のように書いている。

「ある新しさを期せずしてひたすら互いに求めて幾人かが結集する芸術運動は、いつの時代にも存するけれども、しかし、国内におけるほとんどすべてのものがともに『一斉』に立ち上がりつて数十組、数百組、数千組もの結集体をおびただしくつくり出した稀有の事例はわが国の長い歴史において敗戦後の一時期しかなかったのである」(『岡本太郎著作集』第1巻解説『夜の会』の頃の岡本太郎講談社 一九七九年二〇月)。

この時期には、全国各地でおびただしい数の芸術雑誌が創復刊された。占領下の混沌のさなか、出版事情が大変厳しい時代であったが、「敗戦」を経験した若い作家たちが、自らの手で新しいものを一から創りあげようという使命感に駆られて、精

敗戦直後における 文学的・文化的な 精神および行動の 鬱勃たる様相

「午前」ならびに『文化展望』両者の復刻版は、敗戦直後における九州福岡の(ひいては日本各地の)文学的・文化的な精神および行動の鬱勃たる様相を、敗戦後約六十年の人々へ生動的に物語つて甚だ有意義であるにちがいません。私は、『文化展望』の発行・編集に携わった一人として、また『午前』にも因縁の浅からぬ一人として、これらの復刻版が、今日の多くの人々に読まれることを、庶幾します。

大西巨人(作家)



推薦の辞

戦後の文学史 再構築への 弾みとなる 雑誌群

復刻の辞

九州出身の今は亡き三好行雄と会うと、「午前」とか『文化展望』の話がよく出た。出征、捕虜生活一年半ほど経ての復員。焼けた郷里の土地を二束三文で売り払っての上京後の学生生活。そのとき強烈に視野に入ってきたのは本多秋五・埴谷雄高らの『近代文学』、鎌倉文庫『人間』、花田清輝らの『総合文化』であった。その後戦後雑誌の調査、収集に心が傾いたとき、「午前」「文化展望」などが重要雑誌群として浮かびあがってきた。三好との会話が弾んだのは、とくに「午前」で、彼がその背景をキヤッチしていたこともある。私は島尾敏雄らの「こをろ」とのかかわりの濃さと、『近代文学』のメンバーとの関連、さらに大西巨人の「文学に於ける『私怨』の問題——志賀直哉論——」の刺激から生じた関心で、そのバックナンバーを集めたいといったかかりを抱くに至った。

『文化展望』は、他に『映画展望』も出していった三帆書房という出版社への興味と、大西巨人という筋繩ではいかぬ存在の重さを鋭く意識したことよりはじまる。その収集には手を焼いたことを覚えている。

さらに地方を拠点としつつも、いわゆる地方性に埋没せず、中央の文壇の新鮮なメンバーと交錯、しかも文壇意識を払拭しようとする意欲が見られ、これが戦後の文学の一大特質と思うようになつた。『鵬』『ビオネ』『藝術前衛』は率直にいつて東京では探索の網の目からもれていたものである。

この種の雑誌の復刻は、戦後の文学史の再構築への弾みをつけるもので、実物を探索し、調査、点検しようとする研究者への実質的な鞭になる要素をはらんでいる。あのころの昂然とした文学への営みがまことになつかしく、これが「温故知新」なるものの実例といつてよい。

紅野敏郎(早稲田大学名誉教授)

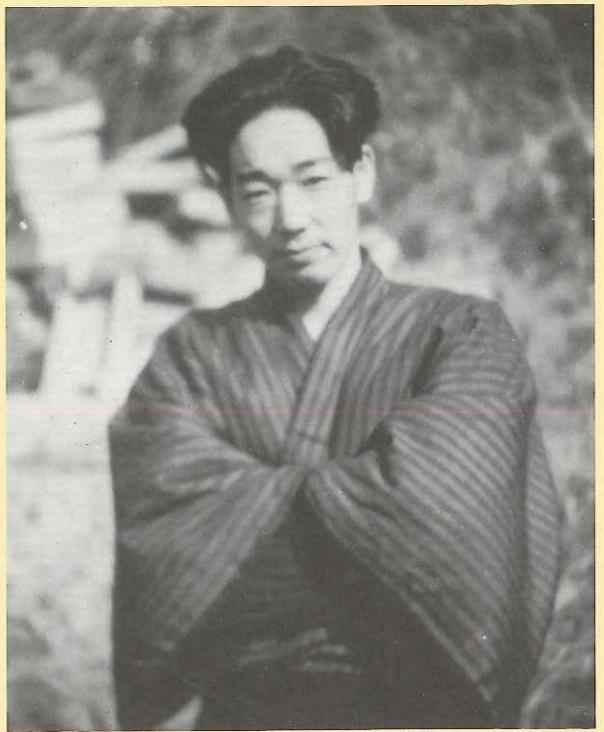


昭和17年頃
矢山哲治(上・中央)、島尾敏雄(上・左)、眞鍋呂夫(下・右)
(写真提供=眞鍋呂夫氏)



火野宅にて
右から、火野葦平、劉寒吉、北川晃二
(写真提供=北川富美子氏)

昭和25年頃、石神井公園にて
檀一雄(右)、眞鍋呂夫(左)
(写真提供=眞鍋呂夫氏)



昭和25年頃、福岡にて
大西巨人
(写真提供=大西巨人氏)



力的に創作活動を開始したのである。

しかし、戦後約六〇年を迎えた現在、それらの雑誌の多くは散逸し、公的機関でも十分に整理され、保管されているとはいえない。また当時の紙質の悪さが危機的状況に拍車をかけている。

雑誌は時代を映す鏡であるという。もう一度手にとることが可能になろう。も、その大空白時代と文学活動の実際を検証することが可能になろう。

小社では戦後、主に地方で発刊された文芸雑誌の復刻を試みる。

まずは福岡県で創刊された文芸雑誌『午前』、総合文化雑誌『文化展望』、詩誌『鵬』・『ビオネ』そしてこの両誌の合併改題誌である『藝術前衛』の五誌を復刻刊行し、読者に提供するものである。……不二出版

前年

文艺雑誌 午前 復刻版 全5巻+別冊1

創刊号 1946年6月(第4巻2号)~1949年3月(全25冊)

別冊○解説・回想・総目次・索引

解説○狩野啓子・長野秀樹・深野治

予定価額●本体90,000円+税

みずみずしい
生気に満ちた
『午前』

狩野啓子
(久留米大学教授)



大正九年生まれの北川晃一は、一年足らずの軍隊生活を経て昭和二十年九月福岡に復員。翌年、勤め先の出版社惇信堂が、南風書房という発行所を立ち上げて刊行することになった商業文芸誌『午前』の編集に携わる。『こをろ』同人であった眞鍋呂夫の協力を得て、福岡での新雑誌の創刊が実現したのである。

昭和二十一年六月『午前』創刊号に、検閲に引っかかった三島由紀夫、林富士馬、庄野潤三、中村真一郎、野村英夫、芳賀檀、島尾敏雄、伊東静雄、三好達治、富士正晴らにも、作品発表の場を提供している。

敗戦直後で、東京が未だ完全に機能していなかつたこと、惇信堂が良質の紙を持つていたことなど、いくつかの条件が重なり、中央での出版ではなかつたにもかかわらず、本誌はこの時代の高い水準を保つた雑誌となつた。多彩な執筆者の顔ぶれも魅力的であるし、戦後の日本の状況が伝わつてくる貴重な資料である。しかし、その全巻揃いを目指すことは非常に難しかつた。編集長としての北川は、檀一雄といふ言葉を信じはしない。一體その過渡期をよきうとこの彼岸へ僕らは達するといふのか。僕らはもう過渡期といふ言葉を信じはしない。身に心の問題を抱いてゐるが故に僕らは無關心にも止められてゐる。僕らの刻々の態度決定はもはや單なる模索ではない。時空の凡ゆる制約が、僕らの目に可能性の假装としきみえない。僕らの形成の全條件、僕らをがんじがらめにしてゐる月の歴史的條件、——そこに僕らはたえず僕らを無窮の星空へ放逐しようとする矛盾せる熱情を讀むのである。決してわれどまで多く詩人の懊惱の象徴であつた「歸鄉」といふ言葉は、僕らには空しい文字だ。

更に――。僕らは文學の所謂「新しさ」に大した關心を拂はぬ心だ。第一次大戦後の歐羅巴は「新しさ」への偏執狂的な時代を體験した。彼らが新らしいとして賞美したものは何だつたか。――僕らは考へて見る必要がある。僕れたる復讐に會ふであらう。

新しさが「發見」であるとするならば、發見ほど既存を強く意識させるものはない筈だ。發見は「既存」の革命であるが、それは既存そのものの本質的な變化ではなく、既存の現象的相對的變化に他ならない。既存の革命といふよりも、既存の意味の革命といふべきだ。それなら發見の意義はどこにあるのか。發見の刹那に於て第一の既存は一旦異常な現象へ高められ、この現象を契機として第二の既存に接続する。發見の驚きは剝離的な現存へのおどろきである。この極めて現存的な體驗が、第二の既存に達した對象の上に有する意義。そこに僕らは發見の意義を見出す。現在の現象的變化が、既存そのものの本質的な變化ではなく、既存の現象的相對的變化に他ならない。既存の革命といふよりも、既存の現象を超えた異例な創造的な現在である。從つてそれは内的形成の過程を經た内的現在として把握される。内的形成とは何であらうか。僕らは自己の既存と對象の既存との一致を認定調和的に考へ、そこに發見の機構を見るのが、この内の形成をもメカニックに考へようとなししない。形成の全條件の内に存するあの「矛盾せる熱情」は、常に體験的なものと

わが世代の革命

[内容見本]

三島由紀夫

逃

北川晃一

(『午前』第一巻第一号より)

(『午前』創刊号より)

『午前』主要執筆者

荒正人	安西均	伊藤桂一	伊東静雄
井上友一郎	梅崎春夫	大西巨	小田雅彦
風木雲太郎	北川晃一	小島直記	駒田信二
佐藤春夫	椎名麟三	島尾敏雄	庄野潤三
芳賀檀	林富士馬	原田種夫	火野葦平
杉浦明平	高橋新吉	谷川雁	檀一雄
富士正晴	那珂太郎	中村真一郎	野田宇太郎
都築均	林富士馬	原田種夫	火野葦平
若きボルテール	高橋新吉	星加輝光	眞鍋呂夫
眞鍋呂夫	高橋新吉	星加輝光	眞鍋呂夫
三島由紀夫	三好達治	山岸外史	湯浅年子
与田准一			

午前七月號 目次

表紙 山田栄二

わが世代の革命 三島由紀夫 四

徒然草小論(二) 那珂太郎 九

横光利一論 小島直記 三

若きボルテール ランソン 三

偽瞞の交替 林富士馬 五

螢 幼児クリストリル 一九章 五

餓 楽 梨の花 橋谷次郎 六

罪 鷄小舍 安西均 七

愛 暮 花の草 庄野潤三 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

浮浪と青年 阿比留勝穂 七

罪 榴野純太君のこと 野田真吉 七

短篇特輯 夏

もう春が近くなつてゐた。いや來てゐたのかもしなれない。書店の楊柳には小さな緑の芽しが斑らにその枝を這つてゐた。紅が下から上へだんだん薄くなつた東の空に太陽が頭を出しかけてゐた。暖い毛布の温もりがまだ私の躰から去りやらぬ朝であつた。私はいつものやうに、サンダルを足先にかけて、澄みきつた大氣を胸に吸ひ込み、昨日の息を白く吐き出しながら點呼場へ出て行った。前へ出ると落着かな眼をおどおどさせて、私の肺の開井が氣楽しく私の腕を押へた。

――班長殿。磯野が居ません。突然のことには、私は彼が何を云つてゐるのかわからなかつた。私が黙つて彼の口許をぢつと見てゐると、彼は背立つて同じ言葉をまた繰返した。

――余り心配するな。彼女は既にでも行つたんだらう。さあ列べ、點呼だ。出來ても出来ないので心配になり、班内、事務室、廊等中身を探しましたが居りません。昨日の夜は確かに自分らと一緒に寝ました。最初はさう直感したにも拘らず、さりとて馴れて了ふともできない自分を、「舊い人間だ」と思ひ込んで諦めてしまつた。そしてかうした読者自身に對する「舊い」感じを與へがちな點に、あの種の「新しさ」文學のまやかしが潜むのではないか。文學の眞新しさは讀者自身をも新らしくするものではあるまい。文學の新らしさと讀者の新らしさとは相携へて進むべきものやうだ。讀者自身に古さを感じさせるやうな新らしい文學は、やがては「古い」と「舊い」一語の批評で葬り去られる復讐に會ふであらう。

新しさが「發見」であるとするならば、發見ほど既存を強く意識せるものはない筈だ。發見は「既存」の革命であるが、それは既存そのものの本質的な變化ではなく、既存の現象的相對的變化に他ならない。既存の革命といふよりも、既存の意味の革命といふべきだ。それなら發見の意義はどこにあるのか。發見の刹那に於て第一の既存は一旦異常な現象へ高められ、この現象を契機として第二の既存に接続する。發見の驚きは剝離的な現存へのおどろきである。この極めて現存的な體驗が、第二の既存に達した對象の上に有する意義。そこに僕らは發見の意義を見出す。現在の現象的變化が、既存そのものの本質的な變化ではなく、既存の現象的相對的變化に他ならない。既存の革命といふよりも、既存の現象を超えた異例な創造的な現在である。從つてそれは内的形成の過程を經た内的現在として把握される。内的形成とは何であらうか。僕らは自己の既存と對象の既存との一致を認定調和的に考へ、そこに發見の機構を見るのが、この内の形成をもメカニックに考へようとなししない。形成の全條件の内に存するあの「矛盾せる熱情」は、常に體験的なものと

文芸雑誌 午前

復刻版 全5巻+別冊1

創刊号 1946年6月～第4巻2号 1949年3月(全25冊)
発行＝南風書房 編集人＝北川晃一

A5判・上製・全25冊を全5巻に合本／総2104頁

●別冊 解説・回想・総目次・索引
別冊のみ分売可1,000円+税 ISBN4-8350-5303-6

●解説 狩野啓子・長野秀樹・深野治

●回想 北川晃一「西日本・もう一つの文壇史」
(読売新聞 1986年～を転載)

伊藤桂一・大西巨人・風木雲太郎 都筑均
那珂太郎・星加輝光・眞鍋吳夫

○原本提供 立教大学図書館
○査定価 本体90,000円+税 ISBN4-8350-5297-8

○刊行 2004年6月

○推薦 大西巨人・紅野敏郎

総合文化雑誌 文化展望

復刻版 全3巻+別冊1

創刊号 1946年4月～第3年13号 1948年6月(全13冊)
発行＝三帆書房 編集人＝大西巨人 他

B4判並製及びB5判上製・全13冊を全3巻に合本／総666頁
●別冊 解説・総目次・索引
別冊のみ分売可1,000円+税 ISBN4-8350-5308-7

●解説 赤塚正幸・大西巨人・狩野啓子
●原本提供 昭和女子大学図書館・日本近代文学館。

法政大学図書館・北川富美子氏・紅野敏郎氏
●査定価 本体28,000円+税 ISBN4-8350-5304-4
●刊行 2004年6月
●推薦 大西巨人・紅野敏郎

詩誌 鵬・ビオネ・藝術前衛

復刻版 全2巻+別冊1

【第1巻収録内容】

『鵬』(6号からFOUに改題)

創刊号 1945年11月～第17号 1948年9月(全17冊)
発行＝鵬同人社 編集人＝岡田芳彦 他

【第2巻収録内容】

『ビオネ』

第1集 1948年3月～第3集 1948年6月(全3冊)
発行＝詩郷社 編集人＝出海溪也

【藝術前衛】

創刊号 1949年2月～第3号 1949年12月(全3冊)
発行＝藝術前衛グループ 編集人＝出海溪也

【本誌は『鵬』・『ビオネ』の合併改題誌】

卷末に『日本前衛詩集』(藝術前衛グループ編1950年)、『世界前衛詩集』(藝術前衛グループ編1951年)を付録として収録

菊判・上製・全25冊を全2巻に合本／総886頁
●別冊 解説・総目次・索引
別冊のみ分売可1,000円+税 ISBN4-8350-5312-5

●解説 赤塚正幸・麻生久・出海溪也

●原本提供 九州大学附属図書館六本松分館・赤塚正幸氏・
麻生久氏・出海溪也氏

●刊行 2004年6月
●推薦 大西巨人・紅野敏郎



不一出版

T-113-0023
東京都文京区向丘1・2・12
電話03・3812・4433
 fax03・3812・4464
振替00160・2・94084

●表示価格はすべて税別。